1945年８月

日本は敗戦という形によって

事実上の終戦を迎えました。

長きにわたった戦争は

数多くの焦土と

数えきれないほどの犠牲者を生み出しました。

1

終戦から十年ほど経った頃、ある動きが起こります。

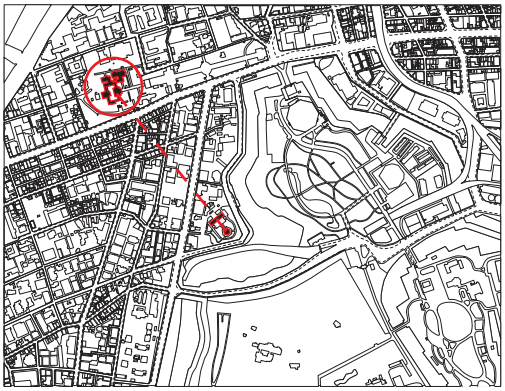
当時の吉田茂首相を中心とし靖国神社とは性格を異にした“無宗教の国立追悼施設”が計画されました。

それが「千鳥ヶ淵戦没者墓苑」です。東京の中心にあるこの小さな追悼施設の地下納骨室には、数十万もの遺骨が納められています。

2

静寂の中に佇んでいる「千鳥ヶ淵戦没者墓苑」には、その建設経緯や設計主旨文を調べてみても、どこにも記載されていない隠された事実があります。

納骨室のある「六角堂」の向けられた方角、すなわち敷地の中心を走る死者たちの眼差し



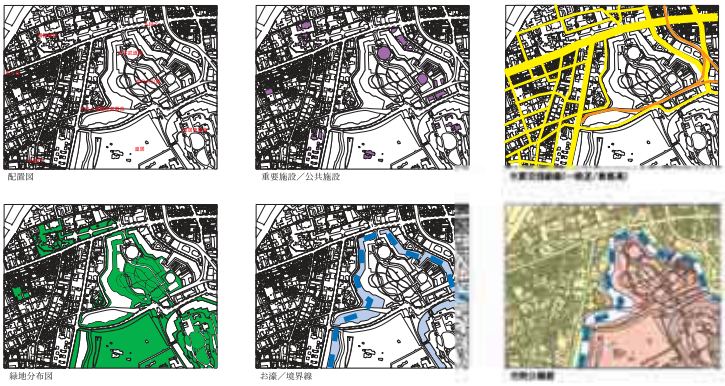
3

その先には「靖国神社」があります。

靖国神社とは性格を異にすることを目的として建設され「無宗教の国立追悼施設」という名目でありながらも、その墓苑の死者たちの眼差しは宗教施設「靖国」に向けられている。

私は、この“軸線”の解体を含めた「国立追悼施設／公園」の計画を提案します。

4



軸線の解体にあたってまず着目したのが、皇居を環状に取り囲む“お濠”の存在です。

皇居周辺は地理的には千代田区に属していますが、ひとたびお濠の内側に入ると区の管轄からは除外され、その大部分が国の管轄になります。

5

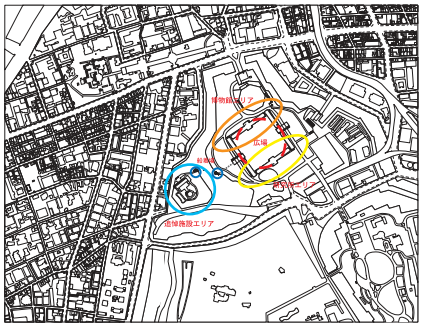
千鳥ヶ淵戦没者墓苑と靖国神社をつなぐ軸線を切り離すために、お濠によって形成されているこの境界線を利用します。

お濠の水を半島状に突き出た千鳥ヶ淵の内地に引き込むことによって千鳥ヶ淵は独立した島となり、お濠の内側、すなわち“東京の中心”側に取り込まれます。

6

世界各地の国立追悼施設には、小さいながらも必ず戦争／歴史博物館が併設されています。

それは、語ることの出来ない死者の想いを代弁するための重要な施設です。



千鳥ヶ淵に眠る戦没者たちの声を翻訳するべく、北の丸公園の位置に新たに歴史博物館と研究所を計画します。島となった千鳥ヶ淵と船でつなぐことによって、追悼施設・博物館・研究所間の強い連携を生み出し、一つの歴史公園として機能するよう計画しました。

7

現在、北の丸公園のある場所にはかつて近衛兵兵営がありました。終戦と同時に近衛兵は解散し、残されたその兵営は警察学校として長らく利用されていました。

新たに設計した博物館の外郭は旧近衛兵兵営の平面を引用しており、訓練の場として利用されていたこの土地は、現代における歴史教育の場として甦ります。

8

歴史博物館

「歴史の井戸」

「記憶の引出し」

歴史研究所

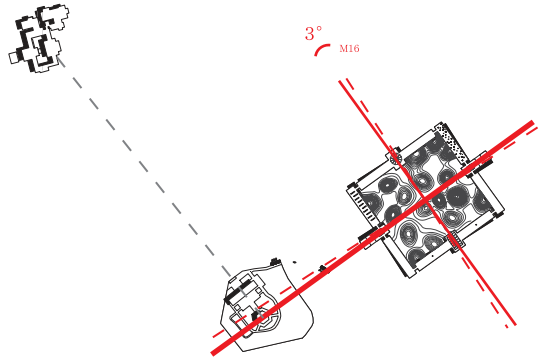
資料図書館

国際歴史教科書室

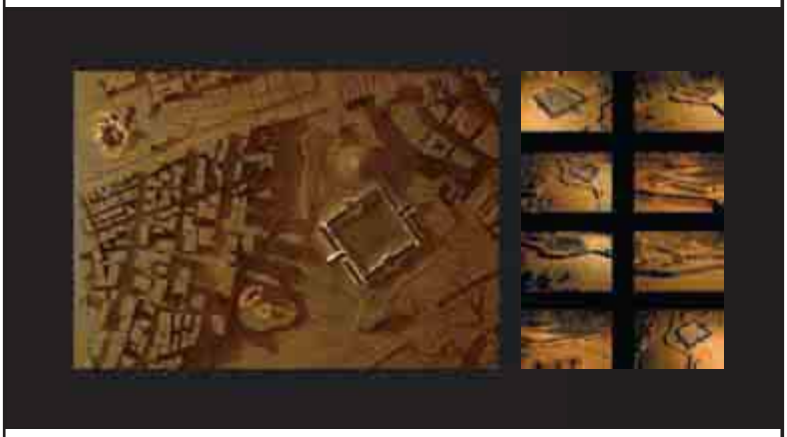
千鳥ヶ淵船着場

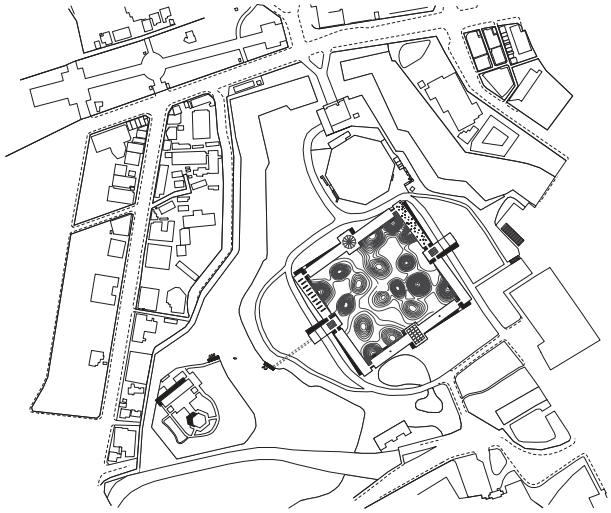
「国立追悼施設への道」

語らいの広場



兵営の正確な位置からわずか3度ほど傾けることによって、新たに建てられる博物館は千鳥ヶ淵への軸線／眼差しを手に入れます。



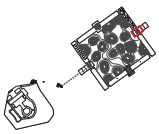


入口：

全ての始まりは建物東側のメインエントランスから。

北側の武道館と田安門、東側の清水門からほど近い場所にあり

多方面から容易に訪れることが可能です。

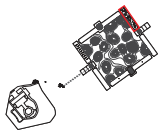


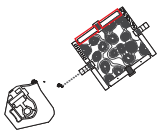
博物館　第一展示室：

エントランスから博物館に入り最初に訪れる第一展示室。

巨大な地上フロアを貫く柱群はいくつかの構造用の柱を除いて

全て中空の筒です。柱は過去の“出来事”を意味しています。





博物館　第二展示室：

歴史研究所の発表や、貴重な資料等を陳列するのに使用される特別展示用の空間。

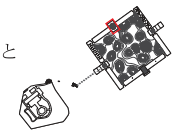
微量な自然光が差し込むアノニマスな展示室は大小様々な空間を持っており、あらゆる

企画展に対応が可能となっています。

博物館　円形ホール：

第二展示室の中間に位置する円形ホールは、高さ12mの吹き抜けと

なっているため、原寸大の巨大な展示物等が設置出来ます。

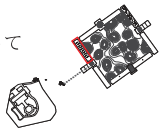


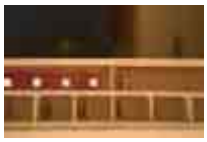
博物館　第三展示室：

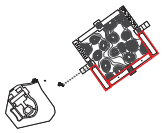
過去100年分の日付と出来事が刻み込まれた36500の引き出しによって構成された「記憶の引き出し」

この膨大な資料庫とも言える空間は訪れた人々が能動性を持って過去のある地点に接するためのアクチュアルな展示となっています。

10年ごとに更新する引き出しは来訪者の手によって白日の下に出されることを待ち続けます。



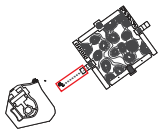


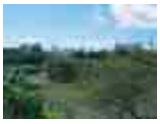


研究所／資料図書館／レクチャーホール：

大小の研究室や講義室を備えた歴史研究所とそれに隣接する資料図書館。

国際教科書図書を含む地上階の開架書庫は一般にも広く解放しており、研究所と博物館の間を結びつける役割を果たします。



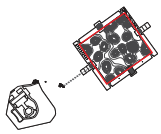


「国立追悼施設」への道：

博物館の出口と資料図書館の間に位置するコンクリートの箱には、彫塑的な切り欠きを施された開口とともに一つの小さな穴が穿たれています。

光の方向に向かって傾斜のついた道を下るとお濠の縁の船着場に辿り着きます。

お濠を挟んだ対岸には「千鳥ヶ淵戦没者墓苑」が見えます。



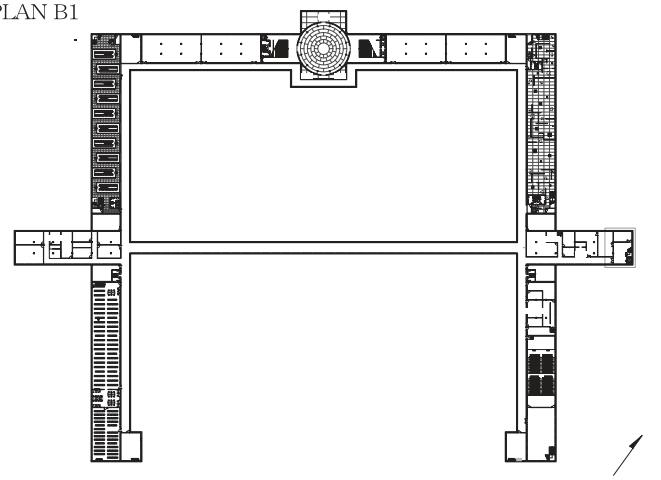
「語らいの広場」：

様々な施設に囲いこまれた広場。

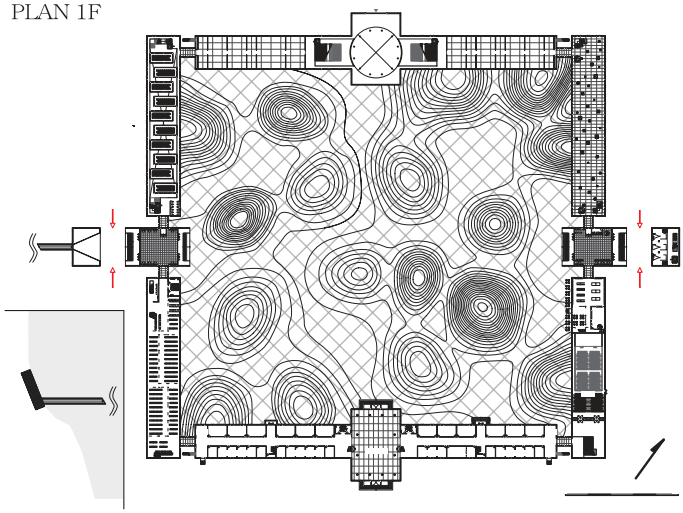
表面を隆起させることによって、かつての集会のような数万単位のコミュニティを作り出せないよう計画されており、起伏に合わせた数十人単位の小さな輪が形作られます。

観光客や研究者、墓苑参拝者人など…あらゆる人々が入り交じることでしょう。

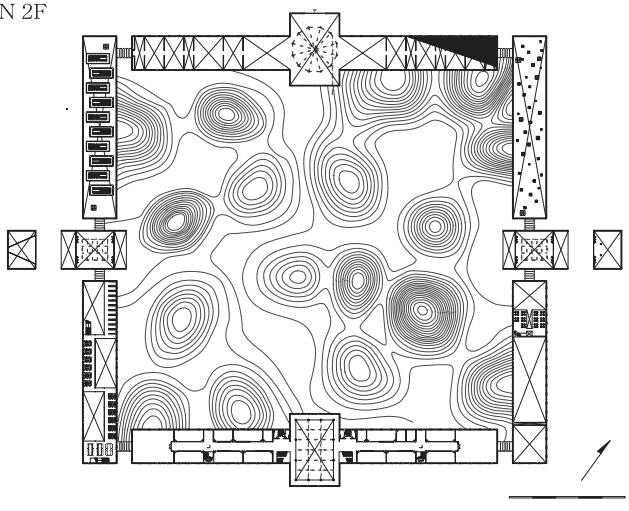
PLAN B1



PLAN 1F

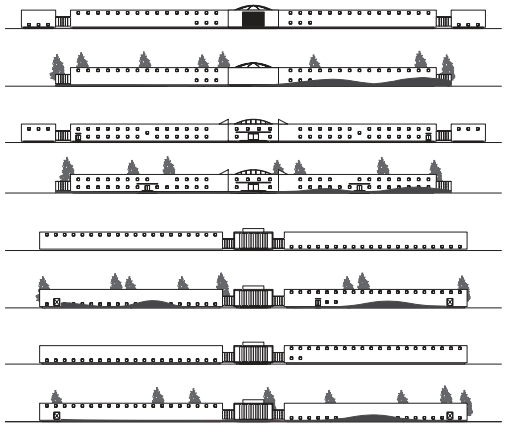


PLAN 2F



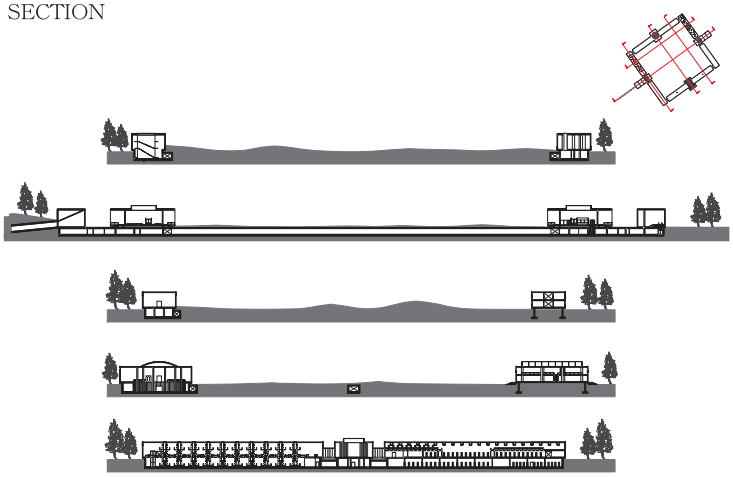
25

ELEVATION



26

SECTION



27

軸線を解体し

歴史・記憶を司る施設群を

一つの公園としてまとめあげることによって

靖国の論理すらも通すことのない

強固な国立追悼施設が

完成することとなるでしょう。

28

この計画により政府から提示されている「新しい国立追悼施設」の必要性は無くなります。

29

「新しい国立追悼施設」とは何か

それは、「新たな戦争犠牲者」のための受け皿にすぎません。

30